



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



「惜別の歌」(島崎藤村作詞、藤江英輔作曲、中央大学の学生歌)の誕生秘話

昭和 20 年中央大学の予科生だった藤江英輔氏は十条の第一陸軍造兵廠で働いていた。この造兵廠では中央大学生と共に東京女子高等師範学校(現在のお茶水女子大学)の女学生が一緒だった。そして、ときおり東京女高師の生徒が「惜別の歌」を口ずさむのを聞いた時、藤江氏は曲をつけたいと思うようになる。しかし、なかなか曲は浮かばない。そのうち、招集令状によって工場から戦地に赴く学友が増え、その送別をしているうちに、突然「悲しむなかれ 我が友よ 旅の衣をととのえよ」の部分の曲が浮かんだ。そして誕生したのが「惜別の歌」である。

惜別の歌は戦後、東京女高師卒の教師が各地で生徒に教えていた。昭和 30 年代になると歌声喫茶で「北上夜曲」と並ぶ人気曲となった。そして昭和 36 年に小林旭がレコード化して全国的に歌われるようになったのである。

なお、この歌詞の一部は「悲しむなかれ 我が友よ」となっているが、藤村の詩は「わが友よ」ではなく「悲しむなかれ 我が姉よ」である。これは、藤村の詩は「嫁いで行く姉」に捧げた(妹からの)詩だったからだ(「若菜集」中の「高楼」にある)。ちなみに、3 番の歌詞は(君がさやけき 瞳の色も 君くれないの 唇も 君が緑の 黒髪も またいつか見ん この別れ)となっている。こうした経緯から中央大生は「惜別の歌」を愛唱し「中央大学の学生歌」と言われるようになったのである。

(追記)「惜別の歌」の誕生秘話については、ノンフィクション作家の第一人者で中央大学卒、門田隆将氏の「康子十九歳戦渦の日記」(文芸春秋社)に詳しい。昭和 20 年当時、東京女子高等師範の学生だった栗田康子さんは中央大学生だった藤江英輔氏たちと一緒に陸軍の造兵廠で働いて





いた。康子さんの父親は広島市長の粟屋仙吉氏であり、米軍の原爆によって市長公舎で即死した。尊敬していた父の死に「父のような人に無残な死に方をさせるなんて、神の愛は辛い」と日記に記した。父の元に訪れた母親の看病(残留放射能に侵されていた)に当たるが、母親は亡くなり、そして康子さん自身も二次被爆で、昭和 20 年 11 月に亡くなってしまふ。「康子十九歳戦渦の日記」を未読の方にはお勧めの本です。「アンネの日記」を上回る感動の実話という評価もあります。(佐々淳行氏の読後感一言)惜しい!こんな女性を死なせて

世界で 2 番目に高い山は?

世界で 1 番高い山はエベレスト(標高 8848m)だが、世界で 2 番目に高い山「K2」はあまり知られていない。K2 は中国、インド、パキスタンをまたいだカラコルム山脈にある山で、標高 8611m。エベレストとの標高差はわずか 237mである(ちなみに日本の場合、富士山の 3776mに対して 2 番目に高い北岳 3193mとの標高差は 583m)。しかし、人里遠く離れた奥地にあるため、その存在を知る人はほとんどおらず 19 世紀末まで名前もなかった。

そのため、カラコルム山系の測量を行った際に、特に標高が高い山にカラコルム(Karakoram)の頭文字「K」を取って順に、K1、K2、K3、K4、K5 と測量番号が付けられ、その K2 がそのまま山の名前になったのである。

そんな K2 はエベレストよりも登るのが難しいと言われており、生きて帰ることが難しい山・過酷な山から「非情の山」と呼ばれている。エベレストの登頂者数が 5500 人を超えているのに対し、K2 の登頂者数はわずか 446 人、死亡者数は分かっているだけで 85 人に達する。K2 の登頂者に対する死亡者の割合は 5 人に 1 人であり、生きて帰るためには高度な登山技術が必要となる。

K2 を登るのが難しい理由として、最も近い村でさえ直線距離で 80km も離れており、アプローチの困難さ、エベレストよりも厳しい気候条件、急峻な山容による雪崩、滑落の危険性などが挙げられる。

「むすんでひらいて」戦前は軍歌だった

童謡「むすんでひらいて」の作曲者はフランスの思想家で「社会契約論」などの著作で有名なジャン・ジャック・ルソーである。この曲は欧米では賛美歌や民謡として歌われている。

日本においても明治、大正時代に賛美歌「グリーンヴィル」として歌われていた。また、同時期に「見渡せば」という題名で「小学唱歌集」に掲載されたこともある。しかし、日露戦争時に「戦闘歌」として軍歌集に掲載され、もてはやされるようになると、賛美歌や唱歌としては歌われなくなった。

そして、昭和 22 年、小学一年生向けの音楽の教科書「一ねんせいのおんがく」に、新しい歌詞で登場したのが「むすんでひらいて」であり、以来、今日まで童謡、唱歌として定着したのである。2007 年には「日本の歌百選」に選ばれている。



騎手のことをジョッキーというのはなぜか

ジョッキー(jockey)という言葉は、競馬の発祥地であるイギリスでは、もともと馬を扱う仕事についていた若者たちのことを指す言葉だった。スコットランドでは、かつて大人の男性のことを「ジョック(jock)」と呼ぶ風習があった(イギリスでは名前の知らない人を「ジャック(jack)」と呼んでいたが、スコットランドでは、フランス語風に「ジョック」と呼んでいた)。そして大人の男性の「ジョック」に対し、若い少年、とくに馬の世話をしている少年たちのことを「ジョッキー」と呼んでいた。競馬がはじまったとき、騎手になったのはこの馬の世話をしていた少年たちで、そこから騎手のことをそのまま「ジョッキー」と呼ぶようになったのである。

二十世紀梨はゴミ捨て場から誕生

1888年(明治21年)大橋村(現在の千葉県松戸市二十世紀が丘梨元町)で松戸覚之助という少年(13歳)が、親戚のゴミ捨て場で見つけた梨の若木を拾って育てたことがこの梨の始まりだった。この梨を育てて10年後、おいしく食べられる梨になったことから1898年(明治31年)に「来たべき世紀の品種」になってほしいということで「二十世紀梨」と名付けられた。

その後、1904年(明治37年)に千葉県から導入した鳥取県で栽培されるようになり、一方、松戸市では幸水や豊水が主力となり、現在千葉県内では二十世紀梨はほとんど栽培されていない。